

PHAYAO レポート 2019-01 (山口県立大学フィールドワーク)

＝心豊かな人々＝

山口県立大学 国際文化学科 3年 坪野有希

はじめに

初めまして、山口県立大学3年の坪野です。

今回、8月19日～8月30日の間、シャンティ山口スタディツアーに参加させていただきました。

本当は、スタディツアー初日から最終日までで起こった出来事を事細かくお伝えしたいのですが（それぐらい面白いことが沢山起こりました。）文字数制限もありますので、泣く泣くかいつまんでお伝えします。主に、モン族の村でのホームステイと、シャンティ寮での体験についてお話しします。

きっかけ

まず、私がこの活動に参加したきっかけを簡単にお話しします。大学3年の夏休みを迎えるにあたって、常々「今年も海外行きたいな。旅行も良いけど、もっと違う形で海外に行きたい。」とっていました。そんな話を友人としていると、友人が「私のゼミで紹介された、プログラムに参加してみたら？」と教えてくれたのです。やりたい事など、なんでも口に出していたら思いもよらない機会がめぐってくるものだな、とその時思いました。

モン族の村の暮らし

プログラムの一つ、モン族の村でのホームステイを体験しました。モン族の村はデコボコした山道を車で登った先にあります。あんなに揺れる車に乗ったのは生まれて初めてでした。道中、雨も降ってきてなかなかスリリングな道のりでした。

村について、お世話になるホストファミリーと対面した時は、言葉も分からない中で仲良くなれるかどうか心配していました。家について、家族はとても歓迎してくれました。

しかし、すぐに打ち解けられた訳ではなく、微妙な空気が流れていました。「会話というコミュニケーションツールが無い今、どう打ち解ければよいのか」と考えていると、「ユキ、キンカーオ」と声をかけられました。

ジェスチャーなどから推測するにご飯の時間のような感じでした。村のご飯は本当においしくて、お米もタイ米と違いモチモチしていました。（村では畑で栽培された米を食べているそう）私は、道中で覚えたばかりの「カンクー（モン語で”美味しい”の意味）」を連呼しました。

モン族の中でも若い人はタイ語が分かるらしく、ホストシスター、ブラザーを仲介にして家族と翻訳機を使いながら会話をしていました。私は最初、ホストシスターとブラザーは兄弟かと思い「兄弟？」と尋ねると二人は笑いながら「夫婦だよ」と教えてくれました。モン族は比較的若く結婚するようで、十代で親になる人が多いそうです。自分と近い年代で結婚していることに本当に驚いて、出会いはどこかなど根掘り葉掘り聞きました。どこの国でも恋バナは互いの距離感を縮めます。

三日間の滞在中、ホストファミリーはじめ村の人たちは本当によくしてくれました。私がスリッパを持っていない事を知ると貸してくれたり（村ではスリッパが主流）、シャワーの際にわざわざお湯を沸かしてくれたり（普通は水でシャワーを浴びる）、ご飯の際は毎回モリモリによそってくれて、食べ終わると間髪入れずお代わりをくれました。また、おもてなし精神もさることながら助け合い精神もあると感じました。例えば、どこの家の子どもでも自分の家の子のように接するのです。村全体で互いに支えながら生きていると感じました。このような助け合い精神は現代の日本では感じにくいものではないでしょうか。家に色々な人が来て時間を共有することが最初は不思議な感覚でしたが、とても心地良い空間でした。日本に帰ってきた今、この村の温かいコミュニティを恋しく感じます。



(ホストファミリー)



(お餅つき)



(一緒に遊んだ村の子ども達)



(またきてねー！)

シャンティ学生寮での生活

もう一つのプログラムは、シャンティ学生寮での生活です。寮では中高生が共同生活をおくっています。大学に入って初めて親元を離れた私にとって、中学生から親元を離れ自立した生活をしている子供たちに驚きを隠せませんでした。学校から帰ると決まった役割(掃除など)をこなし、ご飯も自分たちで作ります。食べる物も自分たちで作っているの、子ども達は農作業などもします。そしてもちろん勉強もするのです。自分が中高生だった頃なんて、勉強と部活しかしていませんでした。子供たちの日々はタイトなスケジュールのように感じますが、何故かゆったりとした時間が流れているようにも感じました。タイの雰囲気こそ感じさせるのでしょうか。

寮では農作業を体験させてもらったり、寮の遠足に同行させてもらったりしました。モン族の伝統工

芸である刺繍の体験もさせてもらいました。屋外に莫藪を敷いて、女の子達と寮の女性スタッフの方に教えてもらいながら挑戦しました。ですが、私は裁縫などが不得意なので悪戦苦闘しました。モンの女の子は3歳ごろから裁縫に携わるらしく、みんなスイスイ縫っていました。最近流行っているらしい、モン族の昔話(もちろんモン語)をラジオで流しながら、マンゴー食べつつ刺繍を縫う時間は想像以上に心地よかったです。私はタイ語がちっとも話せませんが、よく分からなくても何となく理解したり、なぜか笑いが起きたり言語以外のコミュニケーションツールの可能性を見出した気がします。寮のスタッフの人々も良い人ばかりで、暇さえあれば、寮の事務所のソファに居座っていました。みんな気さくに接してくれて、楽しく良い時間を過ごしました。



(シャンティ寮の皆さんと)



(刺繍体験)



(田植え体験)

最後に

このスタディツアーでは、沢山の楽しいことも経験しましたが、考えさせられる多くの事についても学びました。

現地で、私が彼らの何か役に立ったかと言われれば、特にそんなことはありません。

むしろ沢山のものを受け取り、学びました。

お世話になったホイプム村の皆さん、シャンティ学生寮の皆さん、ジッポンさん、佐伯さん、進藤先生にお礼を申し上げます。特に、2人という少人数でも開催を許可してくださったシャンティ山口に感謝します。本当にありがとうございました。

—坪野有希—

－初めてのタイで感じたこと－

山口県立大学 国際文化学科 3年 東垣内萌実

◎はじめに

2019年8月19日～30日の12日間、シャンティ山口のスタディツアーに参加した。タイに行くのは今回が初めてだったため少しの緊張と楽しみの気持ちでいっぱいだった。20日～23日の3日間はホイプム村でホームステイ、23日夜～26日までシャンティ寮で過ごし、27日～29日の3日間ゲストハウスに泊まった。

私は村にホームステイをすることが初めてだったため、始まったときは戸惑いと、言葉が通じないと、何をしたらいいのかわからないことで不安がいっぱいだった。



2歳の女の子

しかし、私がホームステイした家族の2歳の女の子の面倒を見ることで徐々に家族と話せるようになり、交流することができた。コミュニケーションは9割が言葉以外のもので成り立っているということを知り、気持ちや言いたいことというのは態度や行動でわかるもの、伝えることができるものなのだなどと改めて感じた。最後の方には日本語を教えたり、タイ語で私の名前を書いてくれたり、Facebookを教えてもらったりとたくさん交流することができた。言葉は分からなかったけれど、一緒にダンスをしたり、保育園の保護者会のようなものに参加したり

り、一緒に農業に出かけたり、民族衣装をもらったりとても充実した日々を送ることができた。保育園の保護者会では、手の洗い方や病気の説明、熱を下げる時の対処法や「うさぎとかめ」などの絵本が配られた。ここで説明されるということは、まだまだ広まっていないことなのだと思う。

健康や衛生の面でも何か考えて、私たちにもできることがあればいいと思う。

タイの人はみんな優しく知らない人でも会話が始まる。

タイのまちには国旗がたくさん掲げられており、王族の写真もたくさんあった。いろいろな所からタイの人たちは自分の国を愛しているんだと感じた。

私はタイについてあまり途上国のようなイメージは持っていなかったが、実際トイレの状況を見たり、電気があまり通っていないところなどを見てこういった地域もあることを知った。

以前フィリピンに行ったときにも感じたように、途上国で暮らしが貧しいからといって「かわいそうだ」と思うのは私たちの勝手な感情であって、村の人々は、子供たちからおばあちゃんまで毎日本当に楽しそうに生活している。私たちがすべきことはこういった現状を知ること、そしてこういった生活から私たちのような生活にしてあげることではなく、その幸せな生活ができるだけ長く続くようにサポートすることであるのではないかと、ホームステイを通して考えることができた。

最後には交流会も開いてくれて餅つきを一緒にしたり、民族楽器を吹いてくれたり、一緒に踊ったりととても楽しい時間を過ごすことができた。



ホームステイ先の家族



モン族の衣装

◎シャンティ寮

ホームステイが終わって今度はシャンティ寮にお世話になった。シャンティ寮にいる子供たちは中学生から高校生まで様々な年代の子供たちがいるが、皆仲良く協力して生活しているのが目に見えて感じることができた。寮の子供たちと洞窟や国立公園に行ったり、メサイの商店街をまわったり、田植えを



寮生と国立公園

したり、モン族の刺繍を教えてもらったり様々な体験をした。

子供たちは普段朝5時には起床し朝ご飯を分担して作り、7時頃には学校に出かける。学校から帰ってきてからスポーツをしたり、夜ご飯の準備をしたり掃除をしたりと、きちんと分担して仕事を行っている。そんな普段元気だけとおとなしい子供たちのはじける姿を見たのは洞窟に出かけた日の帰り

のバスの中であった。行きのバスでは大音量で音楽が流れ、カラオケ大会が始まった。もうすでに驚きなのだが、帰りのバスはもっと凄かった。行きと同じくカラオケ大会が始まり、これで終わるのかと思いきや、ミラーボールが回りだし、音楽が流れ始めて、皆座席から立ち上がり踊り始めた。私も引張られ参加し楽しかったが、これにはとても疲れた。普段の生活ではきちんと学校に行き、分担して仕事をこなし、休日にははじけるという子供たちの姿をみて、こういう風なメリハリはとても大切でいいことなのではないかと感じた。

シャンティ寮ではガランさんをはじめとするスタッフの方々にも大変お世話になった。夜一緒に話をしたり、たくさんタイ語を教えてもらったり、日本語がわからないスタッフに日本語を教えたり子供たちだけではなく、様々な年代の人々と触れ合えたことが嬉しかった。

ここでも最後の日に交流会が開かれ、モン族とミェン族の踊りを見たり、ドラえもん音頭を一緒に踊って良い時間を過ごすことができた。

最後に皆への質問で「日本に行ってみたい人」と聞いたところ、たくさんの子供たちが手を挙げてくれたことが嬉しかった。少しでも日本に興味を持ってくれていることがわかり、私も今回だけで終わるのではなくこれからも少しでもタイに関心を向けていきたいと思う。

◎環境学習

残りの日は様々な場所にジッポンさんと佐伯さんに連れて行ってもらうことができた。日本とは全然違ったタイの街並みはとても面白かった。国立公園の滝、山の上から見るメコン川、金色でピカピカのお寺、タイからミャンマーとラオスが見えるゴールドントライアングル、山の上にある Phuphahee Coffee、ココナッツまるまるのアイス、夜遅くまでにぎやかなナイトバザールなど日本では見ることのできない景色ばかりで楽しかった。



ココナッツアイス



ゴールドントライアングル

外国に行くと必ずといっていいほど病院に行く私は、今回もれなく病院に行くことになってしまった。会って3日くらいしかたっていないが、シャンティ寮のスタッフの方々がとても心配してくれて、タイの人の優しさを感じた。寮を出発してからも周りの人に支えられ、次の日には何とか回復することができた。

環境学習と共にタイの文化や歴史も教えてもらい、たくさん知ることができた。島国である日本と大陸国であるタイとではまた違った他国との歴史があり、今のタイがあることを知った。

他にもたくさんの果物を食べた。さすが熱帯の国、路上にも様々な果物が売られている。日本では食べることができないドリアン、果物の女王様マンゴスチン、マンゴー、ドラゴンフルーツなどタイでの食べ方も教わりながら食べた。



ドリアンとマンゴスチン



タイからミャンマー・ラオスを眺望

◎おわりに

今回初めてのタイだったが、率直にとっても楽しかった。タイの人たちは明るく優しく、言葉は分からなくてもたくさん交流することができた。現地の人との関係は現地に行かなければ作れないもので、このツアーでまた世界に友達が増えた。「人と人との関係」は一生の宝物になると思う。

今回参加したことを通して、タイだけではなくいろいろな所に関心をもって知ることから始め、積極的に何かに取り組み続けていけるような今後にしていきたいと感じた。

—東垣内萌実—

(2019.10.10 saeki 編集)